【学位請求論文要約】

P・F・ドラッカー
――マネジメント思想の源流と展望

井坂康志

第Ⅰ部　時代観察と〈初期〉言論

ドラッカーの出生から青年前期を生育環境の視点から眺望しようと試みている。知的定点の所在を正確に把握しつつ，市民としてあるいは職業人として彼がとらえた課題を〈初期〉著作における観察枠組みの形成とのかかわりにおいて闡明する点にねらいがある。20世紀初頭にオーストリア人としてウィーンに出生し，ハンブルグ，フランクフルトで青年期を過ごした事実は，言説構造に深く内在する危機への観察という隠された契機を暗示している。その観点に立つならば深刻な近代の危機のただ中に生まれ，人となった事実ほどに，社会観察上の基本的な視座の所在を雄弁に物語るものはない。

というのも，第一次大戦とそれに続く危機観察の原点を見るならば，ヨーロッパ世界の廃墟から始まり，その現代的再生はアメリカ産業社会の中に主として見出されている。ウィーンからアメリカへの移動において，失われた世界再興への意志は『経済人の終わり』（1939 年），『産業人の未来』（1942 年），『企業とは何か』（1946 年）の枢要な主題を占める。自由の喪失をもって廃墟と化した世界に救済があるとすれば，自由の再獲得を通じて解決されなければならないのは言うまでもないためである。

〈第 1 章　ウィーンの時代〉

1909 年の出生から 1927 年の学齢期を終えるまでの歴史的出来事や家庭，サロン，ギムナジウムにおける精神生活を探求しようと試みた。とりわけウィーンの文化的風土との関連や同郷人 S・ツヴァイクとの比較において，その時期を両翼を羽ばたかせる反転のばねの期間として考察しようと努めている。

〈第 2 章　フランクフルトの時代観察〉

フランクフルトの政治的危機の中，暴風に翻弄される時代であり，全体主義という冷厳な歴史的現実に対峙し，ジャーナリスト兼学究として，その原型的な政治イメージや危機への懸念，そして反対に自由社会への肯定的認識について，当時着手されていた『経済人の終わり』の評価を通して考察している。

〈第 3 章　躍動する保守主義としてのアメリカ産業社会〉

ナチズムへの否定的評価とのコントラストをなす，アメリカ産業社会へのドラッカーの肯定的評価とその観察内容を『産業人の未来』と『企業とは何か』を中心に概観していく。

第Ⅱ部　基礎的視座の形成と展開

ドラッカーのアプローチがその本性上歴史性を帯びているとともに，多様な価値観や視点，自由，責任のもとに創造的活動に邁進するマネジメントの言説の底流をもなしている点，反対に青写真や万能薬を掲げて一挙に現実を改造していく理性主義への拒否，イデオロギー化，絶対化への反発が見られる点を確認する。社会観察における認識上の定点は，著作のすべてにおいて，様々な形態をとって潜勢している。ヴィジョンの中枢をなす最も顕著な点は，社会生態学と呼ばれる，あらゆる観察対象を生命と見なす相関主義的アプローチであろう。ドラッカーは社会生態学の基本認識の中に，継続と変革の主題を見出し，尽きせぬ関心を寄せ，その先達としてF・テニエス，A・トクヴィル，R・コモンズ，T・ヴェブレン，W・バジョットなどへの敬意を寄せてもいる。社会生態学への持続的関心は，近代合理主義を超克する主題に照らしても，本書の課題として重要な一面を示している。ドラッカーによる近代合理主義批判は，ナチズムやソ連などの理性主義的革命への不同意とともに，アメリカ連邦主義への尽きせぬ賛意，自由にして機能する社会再建への基底をなす企図とも密接に関連しており，切り離しては論じえないためである。

〈第4章　観察と応答の基本的枠組み〉

観察上の実践アプローチとして理解されうる社会生態学に主眼を置く。社会生態学とはドラッカーの独創になる学問とされ，そのアプローチが倫理観を含む精神的諸価値をも内包し，近代合理主義の超克への企図の伏在する点にも留意している。

〈第5章　自由にして機能する社会への試み〉

自由の概念をドラッカーがどうとらえていたかを問う。とりわけアメリカ産業社会の中に自由にして機能する社会の豊かな萌芽を見出し，その観点から『産業人の未来』においてなされた戦後世界への提言に意を用い，自由や市民性のための正統的な機関としての企業の認識に依拠した意図の所在を考察する。

〈第6 章　知識社会の構想〉

知識及び知識社会をめぐる解釈をたどりながら，近代合理主義の中で比較的低い地位しか与えられなかった実践知の意義を確認していきたい。同様の観点に立つなかで，知識の概念は，知覚的あるいは人格的次元から評価可能である点をも示している。

第Ⅲ部　内的対話と交流

ドラッカーの視座において一定の効力をもつにいたったF・J・シュタール，E・バーク，W・ラーテナウ，M・マクルーハンとの間でなされた内的対話に焦点を当て，視座の深部に定位する影響関係とその現代的再生への意図の所在探索を試みている。

ドラッカーによる言説形成は，個の自由や伝統に内在する黙契を無視し，支配的権力として一元的に糾合するイデオロギー的諸力への政治的抵抗という意味合いを帯びていた一方で，インターディシプリナリーとして，忍耐強い対話や討議におけるドラッカー自身の観察や応答上の帰結でもあった。同時に対話による言説の錬成は，一時代的抵抗のみでなく，近代合理主義という巨大思潮における文明批判をも含意していた。同様の観点から，

言説形成において特別の意味をもつ論者として，上記四者との内的対話と交流を通してなされた解釈上の視座の培養過程を検討する。

〈第 7 章　F・J・シュタール――継続と変革〉

19 世紀の法理論家にして政治家の F・J・シュタールについての論稿をもとに，ナチズムに対して確証しようと試みた，自由と実存の保持と保守主義に由来する政治社会的解釈に論及している。

〈第 8 章　E・バーク――正統性と保守主義〉

近代保守主義の祖 E・バークによる『フランス革命の省察』に依拠し，ドラッカーが想定した保守主義的アプローチの探索を試みつつ，『産業人の未来』に見られるヴィジョンとアメリカ産業社会に重ね合わせた視座の所在を尋ねている。

〈第 9 章　W・ラーテナウ――挫折した産業人〉

20 世紀初頭のドイツを代表する産業人 W・ラーテナウへの共感と支持を手がかりに，マネジメントの担い手に期待される人間像を探索する。組織や責任などの産業人や知識労働者などの原型的イメージが，既にラーテナウの産業，政治，思想的実践に示唆されている点に注目して議論を展開していく。

〈第 10 章　M・マクルーハン――技術のメディア論的接近〉

メディア学者 M・マクルーハンとの交流を取り上げる。知識・技術の解釈論議は，マクルーハンとの対話やその影響関係の地平の上に広がるとの理解を示している。そして，とりわけ印刷技術のメディア論的解釈が，ポストモダンへの着火点として解釈されうる点をも合わせて示唆している。